JISS 社団法人スウェーデン社会研究所 ◎社団法人スウェーデン社会研究所のHPはこちら
Bulletin of The Japan Institute of Scandinavian Studies
JISS所報－No.328－2004.9.30

所報
The Japan Institute of Scandinavian Studies

Index

・目次
・スウェーデンより学ぶ
・持続可能な社会に向けた取組みースウェーデンの環境政策からの一考察
・27回、28回、29回スウェーデン研究連続講座
〔27回〕
新文化と芸術の融合性—尺八の指穴から見た日本文化
〔28回〕
生命科学の巨人ーアマシャム　バイオサイエンスの事業と国際企業を率いる社長としての経験
〔29回〕
私とスウェーデンースカンジナビア三井物産の社長として体験したスウェーデンの素顔
・スウェーデン人の見た日本、日本人の見たスウェーデン
・日本でスウェーデン語を教えるということ
・初めてのスウェーデン
・北欧留学記
・JISS所報原稿募集

■ 目次

・スウェーデンより学ぶ
・持続可能な社会に向けた取組みースウェーデンの環境政策からの一考察
・27回、28回、29回スウェーデン研究連続講座
・〔27回〕
新文化と芸術の融合性—尺八の指穴から見た日本文化
・〔28回〕
生命科学の巨人ーアマシャム　バイオサイエンスの事業と国際企業を率いる社長としての経験
・〔29回〕
私とスウェーデンースカンジナビア三井物産の社長として体験したスウェーデンの素顔
・スウェーデン人の見た日本、日本人の見たスウェーデン
・日本でスウェーデン語を教えるということ
・初めてのスウェーデン
・北欧留学記
・スウェーデンから日本を考える
・JISS所報原稿募集

スウェーデン社会研究所　所報
No.328
2004年9月30日発刊
発行所：社団法人スウェーデン社会研究所
〒105-0013　東京都港区浜松町1-8-1
㈱科学新聞社内5階

連絡事務所
〒124-0024　東京都葛飾区新小岩2-19-7
Tel. 03-5661-6035 Fax. 03-3655-1596
e-mail sweden@tkm.att.ne.jp
URL: http://home.att.ne.jp/apple/jiss/jiss.htm

発行人・編集責任者：波多野裕
Publisher&Editor in Chief : Yutaka Hatano
編集者：久保田健司
Editor : Kubota Takeshi

JISS 社団法人スウェーデン社会研究所
Bulletin of The Japan Institute of Scandinavian Studies
JISS所報－No.328－2004.9.30

目次へ戻る

スウェーデンより学ぶ

スウェーデンより学ぶ

（社）日瑞基金　理事長
原　禮之助

スウェーデンは安定した経済成長、低い失業率、高度の福祉政策を維持している。政治・経済両面において日本とは伝統的に友好関係を維持しており、両国間の問題が全く存在しない数少ない国に属する。

日本の約1.2倍45万平方キロメートルの国土、人口は日本の約十分の一の900万弱、これで安定した経済成長を維持している。日本にとってもっともお手本になる国である。

少ない人口、限られた国内マーケット、これで安定した経済成長を支えるカギは、高い技術力とそれを支える社会の構造・文化、国民の協力と指導者の力量による。

スウェーデン産業の特徴

スウェーデンほど、少ない人口にくらべ世界企業の多い国は他に見当たらない。SKF（鉄）、ボルボ、サーブ（自動車）、エリクソン（通信）、エレクトロラックス（家電）、ABB、サンドビック（機械）、イケア（家具）、等々・・・

鉄、紙/パルプ、電子、機械、家具と分野は異なるが、いずれも製造業が主体で、独自の創造性により高い付加価値を付けている。

産学協同の先駆者

最近既存産業の活性化、新しい産業の創出に"産学協同"が強調されているが、この分野においてもスウェーデンは先駆者である。

現在世界企業となっているスウェーデン企業は、その源をたどると、大学の研究か、私学技術に深い造詣を持つ個人の企業化にいきつく。

先端科学・技術センター

政府機関（Swedish Agency for Innovation System-VINNOVA）により、"科学・技術センター推進プログラム"（Comepence Centres Programme）が設立された。

目的は効率的な創造システム、資源の重点的配分により経済の持続的発展を可能にすること。このプログラムに民間、学界をあげて協力している。北はルレア工科大学から南はルンド大学まで、チャルマー工科大学、カロリンスカ医科大学、リンショッピン大学、王立工科大学、スウェーデン農業科学大学、ウプサ大学、合計8つの代表的な大学に28のセンターが設置されている。

重点分野として

1. エネルギー、輸送、環境技術（8センター）
2. 生産技術（5センター）
3. バイオテクノロジーとバイオ医学テクノロジー（5センター）
4. 情報関連技術（8センター）

以上4分野が取り上げられた。

国民の理解・協力

高い税金と高度の福祉、省エネルギーと環境浄化、いずれの政策の実行には、国民の理解・協力が不可欠である。この面においても、スウェーデンから学ぶべき事は多い。環境問題にしても、政府の施策と共に草の根運動、社会的な盛り上がりを見せている。

指導者の思想・力量

ひとつの組織体、ひとつの国、発展か衰退かは、指導者の力量にかかっている。

スウェーデンの代表的な指導者とは、どのような人物か、国際機関のトップを務めたスウェーデン人2人を例とする。

シーグバード・エクランドとハンス・ブリックス、この二代にわたるスウェーデン人事務総長により、国際原子力機関（IAEA）の基礎は作られた。物理学者と外交官の違いはあるが、この二人に

2

は共通点が存在する。
それは確固たる信念、人種・宗教を問わない公平さ、個人として誰とも胸を開く開放さ、そして平等な人間関係である。

1960年、1970年代、東西冷戦のはざ間でゆれ動くIAEA、エクランドは強調した。
“原子力の基礎は科学だ。科学に人種や国境の壁はない。”この信念の下、事務局に右も左もない結集した力が形成された。

ブリックスは、16年間務めたIAEAの事務総長を退任、ストックホルムの自宅に戻った直後、国連はブリックスを再度必要とし、“イラク大量破壊兵器調査団”の団長を務めた。「国連中心の、大国に偏らない公平な査察」、これはブリックスの強い信念ではなかったか？近著『イラク大量破壊兵器査察の真実』に、その詳細を記している。

平等な人間関係
ブリックスはIAEAを離れるにあたり、関係者を招いて昼食会を催した。
「これからはストックホルムの自宅がオフィスです。秘書もいません。住所とe-mail addressを書いた紙を差し上げます。」
イラク調査団から解放された現在、ストックホルムの自宅で執筆と講演活動に追われ、自らe-mailを打っている。

組織内において上下関係は存在する。しかし、組織を離れると、誰もが平等である。スウェーデンの指導者に“人間としての平等さ”を見る。

結語
（社）スウェーデン社会研究所と（社）日瑞基金は双子の兄弟である。社会の構造・文化、指導者の思想・行動、国民の協力、そして科学・技術に基礎をおく産業と経済の持続的発展、これらはお互いに切り離せるものでなく、相互に関連している。ここに、二つの団体の協力の大きな意義をみる。

目次へ戻る　　このページのTOPへ戻る

3

JISS 社団法人スウェーデン社会研究所
Bulletin of The Japan Institute of Scandinavian Studies
JISS所報－No.328－2004.9.30

目次へ戻る

持続可能な社会に向けた取り組み

持続可能な社会に向けた取り組み
-スウェーデンの環境政策からの一考察-

ものつくり大学　事務職員
長瀬　慎平

1992年の「地球サミット（UNCED）」以降、多くの環境条約が成立し、地球環境問題への取り組みが進展している。にもかかわらず、地球環境問題はいまだ根本的には解決されていない。その一つの理由としては環境条約が実効性を伴っておらず、その背景には環境と開発（経済発展）がトレード・オフ、すなわちゼロ・サム的な関係と捉えられていることがある。特に、工業先進国では環境保護の約束も、開発途上国への支援の約束のいずれもきちんと果たしておらず、また、ローカルからグローバルへという経済についての議論からは、いまだに環境をありがたくない客のように扱っている。

しかし、このような状況にもかかわらず工業先進国であるスウェーデンでは早くから環境問題に対して積極的な取り組みを行ってきた。1987年の「ブルントラント委員会」の報告書（Our Common Future）の発表以降、「環境法典（Miljobalken）」および「環境の質に関する15の目標（15 miljokvalitetsmalen）」、そして「環境税」の導入にみられるように環境のみならず経済をはじめとする様々な分野においても持続可能な社会の責務を負うという、いわば「横からの取り組み」が行われている。

このような各分野、特に経済分野における環境への配慮に関しては、「エコロジー的近代化（ecological modernisation）」論という概念がその説明として引き合いに出されることが多い。この概念は従来のように環境と経済をゼロ・サム的なものとしては捉えてはいないものの、「大量生産・大量消費・大量廃棄」という従来のライフ・スタイルそのものはあまり問題とせず、むしろ環境をさらなる経済発展の道具としてみなす危険性も孕んでいる。例えば、「循環型社会」を目指している日本において、生産段階における「リデュース（発生抑制）」は行わず（すなわち、大量生産はそのままに）、ゴミの処理量を減らそうと「リサイクル」のみに目を向けているような現状からは、本当の意味での循環型社会の実現は困難なように思われる。一方、スウェーデンにおいては高福祉・高負担の福祉国家を維持していく上で環境悪化は福祉財源の拡大につながるという認識に基づき環境政策が行われ、その政策の一環として「リデュース」が行われているのである。

そして、スウェーデンでは、環境政策の実効性を高めるために、地方および市民レベルの取り組みを強化している。もともと福祉政策の土台として地方の役割が重視されてきていたスウェーデンだが、地方の権限は中央政府による規制に拘束されたものであり、地方の自由な裁量はあまり認められてこなかった。そこで、1980年代に「フリーコミューン実験」が行われ、これまで地方を制限してきた規制という障害を取り除き、権限がある程度地方に委譲された。また、同時期に補助金を地方に一括して渡す仕組みに改められた。そのような土壌の下で、スウェーデンはアジェンダ21で述べられているローカルアジェンダ21（LA21）の取り組みにも積極的に取り組んでいる。そこでは地方の権限を強化し、その地域に適した自主的な計画を市民と共に策定し、取り組みに住民を巻き込むことで、単なる「掛け声」ではない実効性のあるボトム・アップの、すなわち「下から」の取り組みが行われているのである。

この「下から」の取り組みを行うためには、その前提として市民が日頃から政策決定にかかわることが可能なシステムを構築することが不可欠であり、中央政府がそれを支援および補完していることはいうまでもない。そして、地方においても国家（政府）レベルと同様に横からの取り組みが行われなければならず、その際にも市民の参加が不可欠である。これは、市民は消費者でもあり、例えば消費者がエコ・ラベルによって教えられた製品を購入し、有害な製品をボイコットすることによって汚染を減らしたというこれまでの経験をみても明らかである。これを促進するためには、正しい情報を市民に公開することが重要である。

以上のようなスウェーデンの環境政策は国内にとどまることなく、例えば北欧諸国間においても社会政策面の協力の一つとしての環境協力を積極的に行ってきている。これには、東西両陣営の狭間に位置し、軍事および外交面での協力が不可能だったがゆえに福祉や環境をはじめとする社会面における協力を積極的に行ってきたという、北欧地域を取り巻く国際政治の状況も影響していた。しかし、この協力関係は北欧諸国が一様に高いレベルの福祉国家であり同質性が高かったこと、そして早くから「下から」の取り組みともいえる地方および民間レベルにおける活

4

発な国境を越えた協力を行ってきたという土台の上に成り立ってきたものでもあった。2001年には北欧の持続可能な開発に関する戦略（Sustainable Development: New Bearings for the Nordic Countries）が始まり、その中で北欧レベルにおいての横からの取り組み、そして縦からの取り組みが志向されている。

この取り組みは、北欧地域のみならず近隣諸国、すなわちEUおよびバルト海地域にも影響を与えるものである。特に、バルト海地域においては、東西冷戦の時代から環境協力が行われている歴史があり、冷戦終焉後は、バルト海の環境汚染に対する浄化協力に加えて、旧社会主義国の民主的な政治的発展、市場経済への移行支援も含めた社会政策面における支援を行っている。これは社会面における協力を中心に行ってきた北欧地域の利点を活かせるだけでなく、今年5月に行われたEUの東方拡大によってEUの結束力の低下および内部対立の不安が囁かれる中において、下位地域協力としての環バルト海地域協力および社会面における地方・市民レベルをも含めた「下から」の協力の重要性は一層増大すると考えられる。環境改善は社会構造の転換をも伴うので、「下から」の縦および横からの取り組みは環境、経済、そして社会の持続可能性が相互不可分の関係にある持続可能な社会にとって不可欠であるといえる。

以上、スウェーデンの環境政策を概観してわかることは、地球環境問題解決のためには縦および横からの取り組みが不可欠であるということであり、その方向性が重要であるということである。すなわち、縦といった時には国家によるトップ・ダウン的な「上から」の取り組みではなく、地方および市民レベルを重視した「下から」の取り組みでなければならず、その地域の特性および課題を考慮に入れた取り組みを市民の参加を包含した形で行われなければならないのである。一方、横からの取り組みは、経済の道具としての環境という位置付けではなく、両者が持続可能な開発のために不可欠かつ不可分の関係にあるということを認識した上での対等な位置関係における統合でなければならない。さらに、取り組みの「つながり」も重要である。横からの取り組みは国家（政府）レベルのみならず地方、市民、国際レベルすべてにおいて行われなければならず、それらがつながることによってはじめて、持続可能な社会が地球レベルで構築されることになるのである。縦および横からの取り組みとは、換言すれば「持続可能な社会の地球化」のための取り組みなのである。この地球化は、国際レベルに広がることのみならず、国家の基底をなす地方および市民レベルに深化させることも意味する。そして、それは「下から」の地球化でなければならず、「下から」の持続可能な社会の地球化が行われることによってはじめて地球環境問題に対する実効的な取り組みが可能となり、それが地球環境問題の解決へとつながるのである。そして、下からの持続可能な社会の地球化を実現するために、スウェーデンの環境政策は多くの示唆に富んでいるといえるのである。

◎ 目次へ戻る　◎ このページのTOPへ戻る

5

JISS 社団法人スウェーデン社会研究所
Bulletin of The Japan Institute of Scandinavian Studies
JISS所報－No.328－2004.9.30

目次へ戻る

6月24日 第27回 スウェーデン研究連続講座

新文化と芸術の融合性
-尺八の指穴から見た日本文化-

琴古流尺八師範
グンナル儘盟リンデル

私の名前グンナル儘盟リンデルの、儘盟（ジンメイ）の名は、私の尺八の師匠で人間国宝の山口五郎先生から頂いた名前である。私は1985年初めて日本に来た時尺八に魅せられ、以後母国スウェーデンと日本を往復しながら尺八を学んだ。1997年に東京藝術大学大学院修士課程尺八専攻を卒業後は、尺八の演奏家として、また尺八の師範として尺八の普及に務めている。本日は尺八の魅力と、その極めて日本的な芸術性、西欧音楽との比較、ひいては芸術と文化の融合ということについて、尺八の演奏も挟みながら述べてみたい。

なぜ尺八に魅せられたか

私がなぜ尺八に魅せられたか、これを説明することは、それがそのまま本日の講演のテーマに深い繋がりを持つので、まず尺八の魅力から述べることにしよう。

初めに尺八の魅力を五点に絞って、これを尺八の五つの穴の名に因んで順番にロ、ツ、レ、チ、リで並べてみると

ロ）一音の重要性
ツ）音色の変化
レ）間（ま）
チ）無音
リ）型と内容の割合

ということになろうか。以下これ等についてひとつずつ説明を加えてゆく。

ロ　一音の重要性

尺八の音楽では、たった一音で全てを表現する力を持っている。（これは他の日本の伝統的な日本音楽にも共通する。）西欧の音楽はメロディー、リズム、そしてハーモニーで構成されており、複雑な内容を表現するにはこれ等の要素を複雑に組合せる必要があるが、尺八では一音でこれを表わすことが出来る。言葉を替えて言うならば、奥の深い内容を、西欧式では複雑性（complexity）で表わそうとするのに対し、日本式では素朴さ（simplicity）で表わそうとする。

ツ　音色の変化

尺八では、音色の変化で様々な趣を醸し出せる。これも西欧音楽にはない表現法である。尺八では（小鼓でも日本琵琶等でも同じであるが）時々刻々音色、音程が変ってゆく。そしてその変化の中に、えも言われぬ世界が作り出されてゆくのである。この表現法を西欧風に言葉で定義しようとしても不可能である。
あえて定義をすれば「あいまいさ」ということになろうか。楽器も日本の伝統楽器は、わざとあいまいな音色、音程が出せるように出来ている。もとは中国から渡来してきたものも、日本でそのように改造をされている。（尺八も輸入された時は穴が6つあった。）
この「あいまいさ」は日本の文化とも大いに関係があるが、それについては後で述べる。

レ　間（ま）

西欧音楽では拍は一定のリズムで刻まれ、曲の特定の区間では拍と拍の間の時間は一定である。尺八（日本）の音楽では拍と拍の間が同じ時間間隔で進行しない。従って西欧音楽のようにある音が出て、その後次の音がいつ出るのか予測がつかない。日本の音楽には独特の間（ま）という時間空間があって、その間（ま）があった後に次の音が出るのである。間（ま）というのは一拍毎に伸び縮みする。そしてこの間（ま）が、極めて緊張感のある音楽を作り出すのである。

チ　無音

西欧音楽においては沈黙はあってはならない。これは西欧人が性格的に沈黙状態に耐えられないということとも関係している。ところが日本の音楽では沈黙は重要な表現法のひとつである。特に尺八では、音があるようで無い、無いようである、というところに絶妙の味わいがある。

リ　型（かた）と内容の割合

尺八に限らず日本の芸術は型を重視する。型というのはしきたりのことで、美しい形（かたち）

をしている。日本では型が完全にマスター出来て初めて内なる内容が表現出来ると考える。個人主義の西欧では芸術は個性を出すことこそが最も重要なこととされ、日本のようにただひたすら先生のする通りに型を学ぶというのは個性を殺す最悪の教育法としか見えない。

ただ、この型を重視する日本式と、個性を重視する西欧式とは、技術の習得プロセスの違いだけであって、どちらが優れているというものでは全くない。日本の芸術も西欧の芸術も目的とするところは同一であり、どちらの方法で学ぶにしても、基礎（すなわち型）も個性も両方備わっていなければ目的達成は不可能だからである。

尺八の演奏と鑑賞のポイント

ここで何曲か尺八の演奏をするので、今述べた尺八の魅力のポイントを思い起こしながら聴いて欲しい。

更にもうひとつ鑑賞のポイントを挙げておく。それは尺八の曲自身も演奏者も、自己主張をしていないことである。これは俳句でも全く同じことが言えるのであるが、情報の発信側は、「私はこう思う」とは言っていない。その作品、その演奏をどう感じとるかは、一切聴く側に委ねられている。これも又、日本芸術の特徴である。

文化と芸術の融合性

以上、尺八音楽を中心に日本音楽の魅力のポイントを述べてきたが、ここで取上げたポイントは、いずれも日本の文化と深い繋がりがある。例えば、日本の音楽で極めて特徴的な「あいまいさ」であるが、日本では人と人とのコミュニケーションに非常にあいまいな表現を使っている。日本人は、「誰が」「何について」「どう考えるか」とか、「誰が」「誰に」「いつ」「何をして欲しいか」等をはっきり言わない。それでも、西欧人であるならば膨大な言葉を使わなければ伝えられない複雑な内容を、日本人の間では日本語で非常に少ない言葉で、極端な場合は何も言わなくとも伝え合うことが出来る。このようなことが出来ると社会的活動においては手間がかからず、極めて効率がよい。しかも、言われた人が気の利く人ならば、プラスアルファの効果まで期待できる。しかし一方このコミュニケーション手段は、いわゆる「仲間内」と言われる閉鎖社会の中でしかとれない。従ってその仲間以外には排他的となる。又、仲間内でも信頼関係を失うと、西欧式のコミュニケーション方法をとって悪い結果を生じた場合よりも、はるかに悪い結果を生じてしまうという恐れがある。

結果的に述べるならば情報の解釈において、芸術でもその他の分野でも、日本では「情報の発信者には責任はなく受け取り手に責任がある」のに対し、西欧では「情報の発信者に責任があり受け取り手に責任はない」と言える。この文化（カルチャー）の違いは大きい。

目次へ戻る　　このページのTOPへ戻る

JISS 社団法人スウェーデン社会研究所
Bulletin of The Japan Institute of Scandinavian Studies
JISS所報－No.328－2004.9.30

目次へ戻る

7月26日 第28回 スウェーデン研究連続講座

生命科学の巨人－アマシャム　バイオサイエンスの事業と
国際企業を率いる社長としての経験

アマシャム　バイオサイエンス（株）
代表取締役社長
服部　恵子

アマシャム　バイオサイエンス社は、バイオテクノロジーを取り扱う会社である。この会社は、もとはスウェーデンとイギリスの会社の合弁で出来た会社であるが、現在は買収されてアメリカの会社となっている。本講座では、アマシャム　バイオサイエンスという会社はどういう会社か、何を販売しているか、そしてどのようなビジョンを持っているか、といったことをお話ししたいと思う。又、私は現在この会社の責任者を務めているが、いろいろの国のカルチャーの混在するこの会社で、私がどのような考え方で、どのような経営をしているかについても触れてみたいと思っている。

アマシャム　バイオサイエンス社とは

アマシャム バイオサイエンス社は、1997年にスウェーデンのファルマシア・バイオテク社と、英国アマシャム社ライフサイエンス部門が合併して成立した。2004年、GE社がアマシャム社（親会社）を買収し、当社も「GEヘルスケア社」の傘下に入った。

GE社について

前述の通り「アマシャム　バイオサイエンス社」は、現在はGEのグループ会社のひとつであるから、この会社については、まずGEについて述べなければならない。

GE社の起源は、1892年トーマス・エジソンが設立したエジソン・エレクトリック・ライトカンパニーである。現在本社は米国コネチカット州フェアフィールドにあり、世界100ヶ国以上で事業を展開している。従業員は約30万人、会長兼CEOは、ジャック・ウェルチを継いだジェフ・イメルトである。GEの連結売り上げは2003年　1,342億ドル、純利益は150億ドルで毎年コンスタントに10パーセント近辺の伸びを示している。そしてGE社は、フィナンシャルタイムズやフォーチューンの、「世界で最も尊敬され、称賛される会社」に毎年選ばれている。

GE社の事業には、エナージー（電力設備）、ヘルスケア、トランスポーテーション（航空機エンジンなど）、インフラストラクチャー（水処理など）、NBCユニバーサル（放送）、コマーシャルファイナンス、コンシューマーファイナンス、アドバンスマテリアルズ（材料）、コンシューマー＆インダストリアル、インシュアランス、エクイップメントサービスの11の事業分野がある。

GE社ビジネスの特徴は、テクノロジードリブンであること、すなわち「技術の発展を先取りすることにより人間個々人の生活をより豊かにしてゆくこと」を会社のミッションとしていることである。

アマシャム　バイオサイエンス社について

「アマシャム　バイオサイエンス社」は、GE社の事業では二番目の「ヘルスケア」の事業分野に属する「GEヘルスケア社」のグループ会社のひとつである。
「GEヘルスケア社」のビジョンは、「人間の体の状態を予測したり診断したりすることにより、個々人に最も適した医療を提供し、人が豊かな生活を送れるようにすること」であって、まさしくGEのミッションに合致している。

「GEヘルスケア社」の事業には、大きく別けて「分子レベルでの画像診断」の方向と、「生命現象解明と臨床への移行」の二つの方向がある。「アマシャム　バイオサイエンス社」の事業分野はこの後者のほうにあたる。そして、その事業で最も重要な技術がバイオテクノロジーである。

バイオテクノロジーとは何か

バイオテクノロジーとは、生命現象の一部を模倣したり調整することにより新たに生まれた技術である。バイオテクノロジーを利用することにより生まれる製品の例を挙げると以下のようなものがある。（括弧内は日本における現在のマーケット規模）

遺伝子組換え医薬品	（3，500億円）
遺伝子組換え穀物	（2，000億円）
酵素入り洗剤	（2，000億円）
脂肪の蓄積しにくい食用油	（500億円）
生分解性プラスチック	（23億円）

8

生命現象とはなにか

生命現象は以下の三つの要素で維持されている。その要素とは、①DNA　②mRNA ③たんぱく質である。

生物の細胞の中には、DNAと　mRNA（メッセンジャーRNA）という物質が存在する。DNAの中には生命を維持するための全ての遺伝子情報が書き込まれている。
mRNAはDNAに書き込まれている情報を写し取り、ここで細胞の部分設計図が作られる。生命が実際に活動する本体はたんぱく質であるが、たんぱく質はDNAとmRNAの情報（設計図）に基ずいて作られる。従って生命現象を模倣したり調整するためには、以上の三要素を解読、解析するということが必要不可欠になるのである。

アマシャムが顧客に提供しているもの

DNA、mRNA，たんぱく質を解読・解析するには二つのやり方がある。ひとつは機械を使う方法、もうひとつは試薬による方法である。アマシャムでは、遺伝子を解析するDNAシークエンサー、マイクロアレイ、たんぱく質を解析するクロマトグラフィーなどの最先端機器や、ラジオアイソトープ標識化合物などの多くの試薬を顧客（バイオテクノロジーの研究・開発者）に提供している。

しかしアマシャムが提供している最も重要なものは、バイオテクノロジーを研究・開発するための（物を越えた）技術支援やアプリケーション、機器のアフターサポートである。
バイオテクノロジーを研究・開発する人をコック、バイオ製品を料理に例えるならば、コックに優れた調理器具（機器）や調味料（試薬）を提供するだけでなく、料理のレシピ（プロトコール）をトータル的に提供して、最高の料理（製品）を迅速に調理して貰うことをアマシャムの使命と考えている。

私の経営理念

私は、現在の会社で経営責任者を務めているが、最後に私の経営理念についてお話ししてみようと思う。

私は高校生時代、私の人生の方向を決める本に巡り会った。それは、DNAの二重螺旋構造に関する本で、この本により生物の生命現象も物理・化学的手法で説明がつけられるということを知り、大変な感銘を受けた。以後、生命現象を解明することで新しい生化学や医療の可能性を探求し、社会に貢献する道が自らの進む道と考えるようになり、現在に至っている。

現在所属する会社は、スウェーデン、イギリス、アメリカ、日本の文化が混じった会社となっているが、そのような会社環境で必要なことは、国による文化の違いを皆が認識することである。
例えばスウェーデン人はStodgy（頑固），イギリス人はIndirect（直接的な表現を避ける）、アメリカ人はOpportunistic（楽天的）、日本人はShy（自分を表に出さない）、といった性格がある。このような国民性の違いを認識した上で、お互い伝えなければならない情報は正確に相手に伝わる文化を会社の中に作っておかなければならない。
そしてこのような異文化の融合の中で国際的なビジネスをしてゆくには
・常にポジティブ的な考え方を持つこと
・変化を先取りし、変化をクリエイトしてゆくこと
・誰に対してもオープンかつ透明であること
が必要である。私はこの三点を、会社を経営してゆく上での信条としている。

目次へ戻る　　このページのTOPへ戻る

9

JISS 社団法人スウェーデン社会研究所
Bulletin of The Japan Institute of Scandinavian Studies

JISS所報－No.328－2004.9.30

目次へ戻る

8月30日 第29回 スウェーデン研究連続講座

私とスウェーデン
スカンジナビア三井物産の社長として体験したスウェーデンの素顔

（社）スウェーデン社会研究所
理事長
瓦林　聖児

私とスウェーデンとの関り合いは、1971年に三井物産の初代ストックホルム駐在員として赴任した時に始まる。最初の赴任が1976年までの5年間で、その間に会社をスウェーデン三井物産と現地法人化した。二度目が1980年から1986年までの6年間で、ストックホルムに在住し、その間スカンジナビア三井物産株式会社として北欧全般を担当する責任者を務めた。本講座では、その時の経験を踏まえて、スウェーデンにおける会社生活、日常生活、あるいは社会等の関り合いの中からいくつかのトピックスを取り上げて、スウェーデンの素顔を紹介してみたい。

会社生活　―　採用

現地法人の立ち上げ時に最も苦労したのは優秀なスウェーデンスタッフの採用である。最初は採用枠に対して数十倍の応募があったので、その中から学卒の非常に優秀な新人を選んで採ることが出来、その点での苦労はなかった。しかし優秀な新人であればあるほど望みが高く、また上昇志向も強いので、そのような人達は皆2～3年で辞めていった。彼等は自らのキャリヤのステップアップのために他へ移っていったので、彼等が優秀であればその人がいたことが会社の宣伝にもなるので、辞められること自体はそんなに問題ではなかった。しかし日本の会社としては定着性の悪さは問題であった。採用の経験を積むうち、従業員は会社と相性の良い人を選ぶのが最良の方法だということが分かってきた。幸いなことにこの頃、会社と従業員の相性の調査にかけては非常に強いフィンランドの人材会社に巡り会うことが出来た。この会社と提携することにより、会社に最も適した人材を採用出来るようになり、定着性の問題は解決した。

会社生活　－　人の管理

自己主張の強いスウェーデン人は遣い難いのではないかと言われている。しかし私は、人を動かす要諦は世界で共通していると思う。私は以前から、旧日本海軍の「やってみせ、話して聞かせ、やらせてみ、褒めてやらねば人は育たじ」という格言を座右の銘としているが、この格言はスウェーデンでも立派に通用した。しかしそれだけではスウェーデン従業員は働かない。スウェーデンでは、仕事の目的と給与の関係や昇進の可能性について、あらかじめはっきりと従業員に伝えておく必要がある。その上で仕事の目標と実際の成果の評価について本人ととことん話し合うことが重要である。これが上司と部下との信頼感に繋がり、従業員が働くモチベーションとなる。私は、仕事の評価についての社員との話し合いには、どんなに忙しくても十二分に時間をとるようにした。そのためか在任中私はローカルスタッフとの間でトラブルを生じたり、大きな考え方の違いを感じたことはない。

ただ初期の頃、男性社員だけで会議をしようとして、女性従業員から厳しい抗議を受けたことがある。この時の体験は、私に「男女平等」の本当の精神を頭でなく体で感じさせてくれただけでなく、その後の長い海外ビジネスにおいて間違いを犯さない貴重な教訓となった。

会社生活　－　スウェーデンにおけるビジネス

私はスウェーデンでのビジネスにおいて取引先に恵まれたと思っている。その大きな理由のひとつは、多くの優れたスウェーデン人社長と信頼関係を築けたことによる。彼等は総じて若く、ものの考え方が卓越しており、プラン、行動共に素晴らしかった。特に感心したことは、技術系出身者が多かったことがあるかもしれないが、彼等は自分の会社のことについてならばどんな些細なことでも全て自分で説明出来ることであった。彼等から学んだことは多い。

スウェーデンでビジネスをする上でもっとも重要なのは時間厳守と話の明快さである。スウェーデンでは時間にルーズであったならば、以後の取引は無理である。又、交渉においては、話の内容は常に明快でなければならない。その場の状況がどのようであっても、焦点をぼかしたり曖昧な表現をすることは彼等の信用を失うには十分で、スウェーデンにおけるビジネスは成功しない。

日常生活　－　スウェーデンの夏と冬

スウェーデンは緯度が高い関係で夏はとても日が長く、ストックホルムでも夜は白夜に近い。夏の美しさ、快適さは例えようがなく、皆長い休暇を取って自然の中に浸り夏を満喫する。夏はスウ

10

ェーデン人が大好きなザリガニのシーズンでもある。8月にザリガニが解禁になると、あちこちでザリガニパーティが開かれる。ここでは普段は静かなスウェーデン人も大いにアクアビットを飲み歌い騒ぐ。このパーティはスウェーデン人と親しくなれる絶好のチャンスで、我々もよく参加した。

冬は逆に日が短く、日中も暗い。気候は寒く雪が降り厳しい。しかしスウェーデンの住宅は皆大きく、立派で頑丈に出来ており、断熱性も良いので建物の中に居れば外はいくら寒くても快適である。一軒家に住んでいると冬に困るのは自宅、庭、屋根の除雪である。雪の降った翌朝は除雪に1時間以上はかかるだけでなく、力もいるので重労働である。

社会生活　―　税金と福祉

スウェーデンは税金が高いことで有名だが、私もスウェーデンを離れる1986年には78%の所得税を払っていた。つまり手取りは収入のわずか1/5である。消費税率も世界で一番高く25%であった。これ等の国民に負担の重い税金は、スウェーデンの手厚い医療、教育などの福祉や高い社会保障の原資となっているのであるが、この税金と受益の関係は日本では十分には理解されていない。私は在任中、日本から北欧の福祉の現状調査に来られる人を数多くお世話したが、優れた福祉施設や福祉システムに感心するだけでなく、それを支えている税制や税の管理の仕方も一緒に勉強して帰るよう必ず薦めたものである。

一方、スウェーデンの「高負担、高福祉システム」は、「誰もが重い税負担をする代わりに手厚い福祉サービスを一様に受けられる制度」と解釈されがちである。実際は高度の仕事をして高収入の人は極めて高い税を払う割にそれに見合うサービスが受けられるとは思えず、低い収入の人が少ない税金で高いサービスを受けられる制度でもある。すなわち「弱者に優しく強者に厳しい」システムなのである。そのためスウェーデンを離れてゆく著名なスポーツマンや芸術家達が多い。

社会生活　―　政治外交

スウェーデンは190年間戦争をしなかった中立で平和な国というイメージがあるが、複雑な国際情勢の中で国体を維持することは並大抵のことではない。そのため国民の政治に関する関心は非常に高く、選挙の投票率は90%近くにのぼる。スウェーデン国民の自国を守ろうとする意識は当然ことのほか強く、特に第二次世界大戦のスウェーデンの対処の結果、ノルウェー、フィンランドからは批判され続けている。しかし、国民皆兵制や、スウェーデンのいたるところに核シェルターがある事実を見ると、中立、平和を標榜しながらスウェーデン人がどれだけ自衛に意を注ぎ、覚悟を持って厳しい外交をしてきたかが分かる。

目次へ戻る　　このページのTOPへ戻る

JISS 社団法人スウェーデン社会研究所
Bulletin of The Japan Institute of Scandinavian Studies
JISS所報－No.328－2004.9.30

目次へ戻る

スウェーデン人の見た日本、日本人の見たスウェーデン

日本でスウェーデン語を教えるということ

語学教師
ディビット・ハルテン

私がスウェーデン語を教えるために日本へ向おうとしていた時、カナダの友人が私に言った。「日本でスウェーデン語を教えるなんて月に行ってガソリンを売るようなものさ」。私はそれを聞いて、「とても難しいこと」ということぐらいしか理解できなかった。何がそんなに難しいのだ？
日本で4年間スウェーデン語を教えてみて、友人の言ったことが全く当っていなかったことが分かったのは嬉しい。しかし「とても難しい」というのはその通りだった。但しその「難しさ」が普通に考えられる難しさとは性質が全く異なるものではあったけれど。

実を言うと私も最初は日本でスウェーデン語を教えてゆけるのか疑問を持っていた。しかし2000年に語学教師の資格を取った時、私は今まで経験したことのない日本独特の「不確かななにか」に挑戦してみたいという気になっていた。

私は今、スウェーデン社会研究所のスウェーデン語会話教室のクラスを持っているが、私がいつも圧倒されるのは、生徒のスウェーデン語に対する愛情と真摯な学習態度である。ではその生徒諸氏はどういう人達であるかといえば、それは実に様々なバックグランドを持つ人達の集まりなのである。家庭の主婦あり、学生あり、商社の営業マンやコンピュータ技術者がいるかと思えば、郵便局、空港、大使館に勤務している人がいるといった具合である。その中でスウェーデン語を仕事にしようとしている人がいるかといえば、それはまずいない。スウェーデンに行ってきた人やこれから行くという人は結構いるが、そのような人達ばかりではない。ではそのような人達が何故スウェーデン語学習にこれほどまで熱心で、しかも着実に素早く習得してゆくのであろうか？どんなことでも論理的、かつ合理的な説明をつけたがる私のような西欧人にとっては、この現象はどうも納得がいかず気持が落着かないのだが、一方とても興味深いところでもある。

日本人もスウェーデン人も、良し悪しは抜きにして似たところが多くある。例えば両者共、人との対立を好まず、本音を表に出さないところなどよく似ている。そんなところが日本人がスウェーデン語を学んでみる動機になっているのかもしれない。しかし生徒諸氏の意見によれば、スウェーデン人の日本人と違うところは、（穏やかではあるが）自分のことばかり喋るところなのだという。そこで我がスウェーデン語会話教室でも、「私は」とか「私の」とか「私としては」といった言葉が飛び交うことになる。このように学習となると、会話も（彼等の言う）スウェーデン流に適応するところがまた面白い。

私にとってスウェーデン語を日本で教えられることは大変光栄である。なぜかというとそれを通じて日本人の奥深い何かに触れることが出来るからである。外国語学習の日本人の熱心さに対して、それを単なる「趣味」と片付けるのは安易過ぎる。日本人が外国語習得にあたって示す真摯さの中には、私に言わせれば日本独特の「語学道で道を究める」とでもいうべきものがあって、正にそこに外国人の心を刺激する日本の文化の何かがあると思うからである。

「初めてのスウェーデン」

横浜市職員
中山　博邦

ほかの国の印象というものは、その国との付き合いが長くなると共に変化し、簡単には言い表せなくなってくる。しかし原点に戻れば、第一印象というものがやはり新鮮なだけに、その国の自国にはない特徴を端的に捉えているかもしれない。そこで私も最初にスウェーデン行った時のことを思い起こして、初印象を述べてみたいと思う。
私は就職して4年目に当たる1988年、初めてかつ一人での海外旅行を計画した。行先はいろいろ検討したが、英語が通じること、自然が美しいこと、先進的な政治・行政が行われていること、東西いずれの陣営からも中立であること、そして以前から繰り返し親しんできた「ニルスのふしぎの旅」の国であることからスウェーデンを選んだ。

12

スウェーデン行きの空の旅はSASを利用したが、当時のSASは途中アメリカのアンカレッジでの給油が必要であった。入国にあたって交換したスウェーデン紙幣にラーゲルレーヴと共にニルスの絵があるのを見てまず文化の違いを感じた。ストックホルムの第一印象は？　それは人々の使用する「香り」であった。なにかムスクのような香りで、これは「お風呂の文化」ではなく、「シャワーの文化」のなせる業ではないかという気がした。

スウェーデン人は男女共身長の高い人が多い。私も180cm以上あるのだが、ストックホルムの街を歩いていて自分と同じ位の身長の女性を見て驚いた。しかも足は彼女のほうが長いのだ。又、日本ではあまりお目にかかれない金髪、青い目、白い肌で、「日本に来れば絶対モデルになれるのに！」と思われる美しい人が普通の人達に混じって街や車内で見られるのにも感動した。ただ全ての人が金髪、碧眼、白肌というわけではなく、人口の一割を占めると言われる移民の存在もあって、髪、目、肌の色は様々であり、国際都市ストックホルムでは、そのことを特に強く感じた。

ストックホルム市内の観光は「ストックホルムカード」でスムーズに行うことが出来た。これは、購入時点から24時間等何種類か有効期間があって、その間市内の交通機関の運賃や美術館・博物館等の入場料が無料になるというものである。このカードでは国会議事堂などの国の機関や王室の施設にも気楽に入ることが出来、初めて訪れた観光客にはまことに便利でかつ親切な、良いシステムであると思った。

初めての国で特に印象に残るのは、やはり人との出会いである。知らない人とは話をしないと言われるスウェーデン人であるが、着いてすぐ、私が駅でスーツケースの入る大きいサイズのロッカーが見つからず困っていると、年配の女性が「あちらよ」と教えて下さり、助けられた。ヘッセルビー岸を見に行く車中では、地元の人から「どこへ行くの？」などと話しかけられ、その方に駅からメーラレン湖につながる湖の岸まで案内して頂いた。ウプサーラからストックホルムに戻る列車の中で出会った年配の女性は、無作法に足を座席に載せている若者達をたしなめておられた。若者達は「ごめんなさい」という感じできちんと座り直していたが、それを見て「日本では廃れてしまった社会によるこのような躾が、スウェーデンには依然として存在するのだ」と思ったものである。この時私は、そのご婦人から林檎を頂いたのだが、日本の林檎に較べて小さく酸っぱかったけれど、私のスウェーデンのすがすがしい思い出として今でも強く印象に残っている。

（北欧情報ホームページ　NORDEN`S WEBSITE　発行者）

目次へ戻る　　このページのTOPへ戻る

13

JISS 社団法人スウェーデン社会研究所
Bulletin of The Japan Institute of Scandinavian Studies
JISS所報－No.328－2004.9.30

目次へ戻る

北欧留学記

スウェーデンから日本を考える

藤田　暁生

私は子供の時に親の仕事で1年間米国オハイオ州に住み、そして20才の頃留学で1年半中国天津に住んだ。去年大学を卒業した後、日本や中国などの国々が向かっている米国的な方向性に対して、それとは異なる選択肢を示そうとしているスウェーデンに興味を持ち、この国で勉強してみたいと思った。特に関心のある分野は、環境やエネルギーに関する取り組みで、更に範囲を広げると、経済効率と矛盾するように思われる環境・福祉政策を生み出すその土壌を見てみたいと思ったのである。現在ベクショー市の北端にある聖シーグフリード国民高等学校に寮生として入っているが、それはスウェーデン人に囲まれた生活をしながら、言語を含めてこの国について知るには丁度良い環境と考えたからである。

この学校には半世紀ほどの歴史があり、現在は70人程の寮生を含め200名弱が通っている。生徒は10代後半から20才前後が主で、高校の課程に相当するコースと、音楽・美術・ジャーナリズム・聖職者養成などの専門コースがある。校内には、結婚式などもあげられる地域唯一のチャペルがあり、日本でいう予備校と専門学校を合わせて地域密着型にしたもの、といったところであろうか。ちなみに、外国人の生徒は移民と留学生を合わせて25名程。私はこちらに来てからスウェーデン語を始めたため、初めの半年間は外国人向けのクラスに所属し、今学期からは高校の理科系課程のクラスに移った。個人的に英語と数学の時間を語学等にふりかえてもらい、週15.5コマの内訳は語学7コマ、社会・宗教3コマ、理科系4.5コマ、体育1コマ（各コマ90分）となっている。この中には、語学担当の先生から「スウェーデン語に漬けるためにこのクラスに入れたのだから、分からなくても聞いていなさい」と言われて、理解できずに聞いている授業も沢山ある。授業は月-木は朝8時半から3時で金曜は午前のみ、お茶と昼食の時間が挟まる。寮生は朝晩の食事も食堂で出され、放課後は5時の夕食、そして宿題・散歩・体育館での運動・サウナ・読書などで、森と湖に囲まれている学校での生活はゆったりしている。もっとも私は語学の問題で、ゆったりどころでないが。

私は今回の留学が初めての欧州であるが、生活の中で面白いと感じることは沢山ある。それは単に西洋と東洋の文化の違いだけでなく、明治以後の日本で作られた‘西洋観’と、今ここで見る現実とのギャップではないだろうかと思っている。　思いつくまま例を挙げると、Ⅰ　頻繁に遅れるバスや電車、恐ろしく対応が遅くいい加減な各種サービス（たとえば電話の設置）、そしてそれに対して寛容な人々　Ⅱ　資本主義でありながら経済効率と矛盾するような長期休暇・短時間労働、夏の観光地ですら日曜日には休む商店　Ⅲ　ときどき芋虫が入りこんでいる有機野菜のサラダや、レストランで食事中に飛んでいる虫が料理に入っても「エクストラ・プロテインだね」と笑ってすます店員　Ⅳ　日本人の「スウェーデン人はスタイル抜群、オシャレでカッコいい」という想像と、自然に着こなしてはいるものの、同世代の日本人ほど体形・服装・化粧に気を使っていないこちらの若者　Ⅴ　「自然に囲まれ自然と触れ合う国民性」といわれながら、森いっぱいにブルーベリーが溢れているのに摘まずにスーパーでブルーベリージャムを買う人々、など。
こんなことから、「西洋的近代化に成功した」とされる日本では、欧米から学んだとされる経済性・合理性・近代科学・衛生観念といった理念は、実は相当に和風化されたものであると感じた。それと、私のスウェーデン人の先生の「日本に行ってその文化の高さとシステムの洗練度に驚いた」という言葉を合わせて、日本とスウェーデンについて考えたことを以下のようにまとめてみた。

スウェーデンには、「勝手につくりあげた‘西洋的近代化’像を持ち、生真面目で几帳面な日本人から見れば、矛盾や不便は感じても改善する気のない‘いい加減’」という面と、「理念はともかく現実として問題が起きなければいいし、まず自分が大切だと思うことを優先する‘良い加減’」があるように見える。一方日本を見ると、生真面目でやる気に満ちた日本人は、スウェーデンにはない想像上の‘西洋的近代化’をひたすら志向しているように思える。
もし「豊かさと幸せの根源は経済力」といえるのならば、犠牲を払いつつも西洋的資本主義を導入し、それを追い求める日本人の心意気と努力も理解できる。しかしそれでは結局、一定の欲望を満たすことしか出来ない。そして西欧化の過程において、伝統的な質素・我慢・節約・自制などといった理念を捨て去り、西洋的近代化を自らの欲望を満たすために利用してきているように思える。

14

本来人間が暮らしていく上では経済・技術・文化・社会・生活・環境などのバランスが大切であり、どれか1つを優先することは出来ない。1つのことに没頭した専門家の判断が素直な素人のそれよりも優れているとは限らない。それと同じように、一見‘いい加減’なスウェーデン人のほうが、暮らしと社会というものの現実を素直に受け止めており、それで‘良い加減’なバランスを作り出しているのかもしれない。

そして今、スウェーデンを鏡にして日本の将来像を描くとき、さらに妄想的な‘西洋的近代化’像を、GDPの値・ノーベル賞・オリンピックのメダル数などで膨張させても、本来の意味での幸せが増してゆくとは思えない。それよりも、日本は日本の社会を自ら再評価し、そして独自の文化を顧み、身の丈に合う方向性を見出したほうがいいのではないか。

（スウェーデン　ベクショー市在住）

目次へ戻る　　このページのTOPへ戻る

15

JISS 社団法人スウェーデン社会研究所
Bulletin of The Japan Institute of Scandinavian Studies

JISS所報－No.328－2004.9.30

目次へ戻る

北欧留学記

JISS所報原稿募集

JISS所報では、北欧・スウェーデンの歴史・政治・経済・社会制度などを研究しておられる方、公的機関や福祉・環境・教育などの社会活動機関、企業活動等での交流を通じて北欧・スウェーデンに興味をお持ちの方、あるいはJISSやJISS所報にご意見をお持ちの方々からのご投稿を広く募集しております。

応募方法は下記の通りですので、ふるってご投稿下さい。所報の編集方針に従って逐次掲載してゆきます。

1　応募資格

特にありません。ただし氏名・所属・連絡先は明記下さい。匿名の投稿は受付けません。

2　内容と字数

北欧・スウェーデンに関するものであれば内容は自由ですが、800字（程度）、1，600字（程度）、3，200字（程度）のいずれかの文長でお願いします。
（まだ文になっておらず、テーマ、アイデアの段階であっても、投稿ご希望であればお気軽にJISS 所報編集部にご相談下さい）

3　掲載の可否と掲載時期

掲載の可否、掲載時期の判断はJISS内の所報編集部で行います。送られた原稿は返却しませんのでご了承下さい。

4　謝礼

ご投稿への謝礼は、無料ということでお願いいたします。

5　原稿の送付先

原稿は、「JISS事務局　所報編集係」宛て、Eメール、郵便、またはファックスにてお送り下さい。

目次へ戻る　　このページのTOPへ戻る

16